

つれづれぐさ
徒然草

けんこうほうし
兼好法師

【作者】

兼好法師は、鎌倉時代後半の1283年ごろ、京都に生まれました。
若いころは朝廷に仕えていたと言われますが、30歳ごろ出家、和歌を詠んだり、旅をしたりして過ごしたようです。

【作品】

兼好法師の随筆集が『徒然草』です。作者の人生観がうかがえるほか、鎌倉時代終わりの社会を知ることができます。住まい、趣味、逸話、人間観察など様々な題材が取り上げられています。

《序段》全体の執筆姿勢がうかがえる文章です。心に浮かんだり消えたりする思いを書いてみよう、と述べています。

《第五二段》仁和寺の法師が、京都南方の男山にある有名な神社に行ったものの、麓の付属神社だけを拝んで帰ってきてしまったというユーモアのあるお話です。

《第一一七段》理想の友達について述べています。

「よき友は知恵ある人に医師なりさてその上は物くるる友」

《第一二三段》幸福のための条件は、衣食住と医療、とあります。

序段 じよだん

つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心こころにう
つりゆくよしなし事ことを、そこはかとなく書きつくれば、あ
やしうこそものぐるほしけれ。しゅうー

第五二段 だいごじゅうにだん

仁和寺にある法師、年としよるまで、石清水を拝まざりけれ
ば、心こころうく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちよ
り詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得こころえ
帰りにけり。さて、かたへの人ひとにあひて、「年比思ひつる
こと、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけ
れ。そも、参りたる人ひとごとに山へのぼりしは、何事なにことかあり
けん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、
山までは見みず」とぞ言ひける。やま
少すこしのことにも、先達せんだちはあらまほしき事ことなり。

第一一七段

友とするにわろき者、七つあり。一つには、高くやんご
となき人。二つには、若き人。三つには、病なく身強き
人。四つには、酒を好む人。五つには、猛く勇める兵。
六つには、虚言する人。七つには、欲深き人。

よき友三つあり。一つには、物くるる友。二つには、医師。
三つには、智慧ある友。

第一二三段

無益のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事
する人とも言ふべし。国のため、君のために、止むことを得
ずしてなすべき事多し。その余りの暇、幾ばくならず。思
ふべし、人の身に、止むことを得ずしていとなむ所、第一
に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、
この三つには過ぎず。饑えず、寒からず、風雨にをかされ

ずして、閑しずかに過すぐすを樂たのしみとす。ただし、人皆ひとみな病やまいあり。
病おにをかされぬれば、その愁うれ忍えびがたし。

医療いりようを忘わするべからず。薬くすりを加くわへて四よつつの事こと、求もとめ得えざるを貧まずしとす。この四よつつ欠かけざるを富とめりとす。この四よつつの外ほかを求もとめ営いとなむを驕おごりとす。四よつつの事こと儉けん約やくならば、誰たれの人ひとか足たらずとせん。

★テキストは、『新編日本古典文学全集44』（小学館）のテキストをもとに一部加工しています。

★図書館で読むには

『徒然草』（角川ソフィア文庫）

*2002年版と2008年版の2種類あります。

『新潮古典文学アルバム（方丈記・徒然草）』（新潮社）

『徒然草』（ちくま学芸文庫）

『徒然草（新潮CD）』（新潮社）*耳で聞けます。